

# エピソード記憶、経験記憶、記憶表現

櫻木新 (Shin Sakuragi)

芝浦工業大学

エピソード記憶と意味記憶はもっともよく知られた記憶区分の一つである。この区分は宣言的記憶の二つのあり方として Endel Tulving によって導入された。これら二種類の宣言的記憶の違いは必ずしも完全に明確ではないが、Tulving はそれらの記憶が有する「情報」(“information”)や「作用」(“operations”)、そしてその「実生活における適用」(“applications”)が二つの異なる記憶システム (“two systems”)として概念的に区別できると考える (1983, 9)。多くの場合その違いは、想起中に我々がどういった意識経験を有するかによって性格付けられる。例えば Wheeler は、前者が「想起意識」(“autonoetic awareness”)と「過去のある時の再経験」(“the mental reexperience of a moment in the past”)を伴うのに対し、後者は「知っているという意識のみ」(“noetic (knowing) awareness only”)を伴うとする (2000, 598)。

この記憶区分が当時の分析哲学の強い影響下にあったことは Tulving (1983) の記述から読み取ることが出来る。1972 年の区分を論じて、Tulving は Bergson と Russell に並んで Furlong に言及し、Furlong は「人々が手紙を投函しているのを見たこと」を覚えていると言う時 (“when a person says he remembers seeing someone post a letter”)と、「ある数の平方根を覚えていること」(“remembering the square root of a number”)の違いから、前者における特定の「時空間上の文脈とイメージ内容」の存在を示唆しているとする (ibid., 17)。また彼は Episodic memory という名称が Munsat の *Concept of Memory* (1966) における Non-episodic Memory についての議論にインスピレーションを受けたことも明らかにしている (ibid., 29)。そして Munsat (1966, 57) の議論もまた同様に、“remember”を主動詞とした記憶言明 (memory statement) の例文についての考察からはじまっているのである。

“Remember”の用法へ訴えてエピソード記憶を論じるアプローチは、遡って C.D. Broad の *The Mind and Its Place in Nature* (1925) の Chapter V にも見ることが出来る。Broad (ibid. 221) はそこでの議論を“memory”という語の曖昧さについての指摘から書き始めているが、“memory”よりもむしろ“remember”の用法に注目が向けられている。Broad はそこで知覚記憶 (perceptual memory) の概念を、“remember”を主動詞とする 4 つの例文を引いて提案しているが、そのうち最初の例文“I remember having my hair cut last week”と 4 つめの例文“I remember hearing Mr Russell lecture”で“remember”が...ing フォームの動詞を直接の目的にとる文を引いている。勿論これらが Furlong の二つの例文のうちの前者と同じ文法形式を取っているのは偶然ではない。多かれ少なかれ、この議論は (様々な呼称で) 多くの哲学者、そして心理学者に、受け入れられてきた。

Werning はこのような“remember”の特定の用法に訴える性格付けを、“remember”の「文法的な特徴に」(2017, 9) 訴える記憶概念だと考える。エピソード記憶や知覚記憶の概念が本当にその様に性格付けられているかどうかは別として、確かにエピソード

記憶と”remember”の用法に訴える分析哲学上の議論は歴史的なねじれの中で関係しており、しばしば混同されてきた。

Wollheim は過去の知覚経験の再表象におけるパースペクティブの違いに注目することで、哲学上の記憶概念—ここでは彼にならって経験記憶と呼ぶことにする (1984, 101) —と個別のエピソードの記憶の間の潜在的な区別を指摘する (ibid., 102-5)。我々は時に過去の経験を、元々の視点とは違う視点から再経験する。Wollheim が”acentered event-memory”と呼び (ibid., 102)、Nigro and Neisser (1983) によって観察者の記憶 (observer memory) と名付けられたこの記憶現象において、『再経験』される経験はそもそも存在しない。従って、それらが個別のエピソードの記憶であったとしても、『本当の』再経験ではないが故に、『経験の』記憶ではないと考えられるかもしれない。

他方でこのような視点の変更は決して希な現象ではなく、またその内容が正確かつ詳細で、過去の経験に基づくものだと考えるべき理由は十分に存在する。McCarroll (2018) はこのような観察者視点からの記憶も、経験記憶から区別されるようなものではなく、一つの同じエピソード記憶のシステムによって実現されると考える。

この対立を記憶表現の分析に立ち戻って検討すれば、’remember’の用法に訴える性格付けからは、我々が『本当の』再経験だけを記憶と見なし、観察者の記憶が過去の経験の記憶ではないと考えるべき理由はあまり明確ではない。またこの論点を日本語の記憶表現から再検討するなら、そもそも日本語には”remember”の文法的な特徴に一致する表現が存在しない。多くの場合、日本語における記憶表現は個別的な出来事の記憶をそのほかの記憶から明確に区別するような用法を持たず、「思い出す」や「覚えている」の内容から再経験の視点を特定することは困難なのである。

#### 文献リスト

C.D. Broad, *The Mind and Its Place in Nature*, Reprint, Little Field, Adams & Co., 1929(1960)

C.J. McCarroll, *Remembering From the Outside: Personal Memory and the Perspectival Mind*, Oxford University Press, 2018.

S. Munsat, *The Concept of Memory*, Random House, 1966.

G. Nigro, and U. Neisser, “Point of View in Personal Memory,” *Cognitive Psychology* 15, 467-482 (1983).

E. Tulving, *Elements of episodic memory*, Oxford University Press, 1983.

M. Werning and S. Cheng, *Taxonomy and Unity of Memory. The Routledge Handbook of Philosophy of Memory*, Edited by S. Bernecker and K. Michaelian, New York 2017. pp. 7-20.

M.A. Wheeler, “Episodic Memory and Autonoetic Awareness,” in *The Oxford Handbook of Memory*, E. Tulving, F.I.M. Craik (eds), Oxford University Press, 2000, 597-608.

R. Wollheim, *The Thread of Life*, Paperback Edition, Yale University Press, 1984 (1999).